

徘徊と逍遙

——阮籍「詠懷詩」の一考察

森 田 浩 一

京都大學

阮籍⁽¹⁾（二一〇—二六三）の「詠懷詩」八十二篇⁽²⁾は、その一篇一篇が完結した小宇宙を形づくらない。また、それら一篇一篇が集まった、連作の如くにある「詠懷詩」全體にしても、發散していた一篇一篇がその全體を眺めてみれば何らかのものに收束していくのが見られるかというとうそうでもない。

全體としても收束を見ないということはつまり、「詠懷詩」が雜詩という流れの上にある詩群、すなわち「外物に觸發された心情を眞率にのべた」⁽³⁾ものであって、その時その時にその場その場で生みだされた一篇一篇の詩が、本來から全體として構成される意圖なく、いわば自然と堆積し

た結果であるからだろう。

また、『文選』（卷二十三）に摘録された「詠懷詩」に李善は、その第一首に顔延年らを引いて注し、「（阮）嗣宗、身は亂朝に仕へ、常に謗に罹り禍に遇ふを恐る。因りて茲に詠を發せば、故に毎に憂ひ生ずるの嗟き有り。志は刺讒に在ると雖ども文に隱避多く、百代の下、情を以て測り難し。故に粗ぼ大意を明らかにし、その幽旨を略すなり」と記す。顔延年・沈約は南朝宋の人であり、阮籍からほぼ百年以上後の人であるが、彼らをして「百代の下、情を以て測り難し」と言わしめるわかりにくさは、主要には、彼らの「詠懷詩」を読む態度が、一篇一篇の詩が持つ「刺讒」を汲み取ろうとする方向へ傾きがちであったことによるのは否定できないだろう。

以後、「詠懷詩」の讀者のうち、その解剖を試みたものの殆どが、その「刺讒」探しに精力を傾けたことは、『文選』の注からして、すでに當然の成り行きであったと言えるだろう。「詩は志のゆく所なり」（詩・毛序）という。阮籍にまつわる數々の逸話、實際に平凡ならざるその一生は、

阮籍その人の魅力を人々に印象づけ、讀者達にその魅力ある人物の「志」を読み取りたいと願わしめ、「刺譏」探しの方向へとさらなる拍車をかけていったのも無理ならざることであつた。しかし、そのような「刺譏」探しの読み取りは、多くの場合牽強附會なものとなりがちだったのである。

これらのことは、發散している「詠懷詩」一篇一篇と、全體としてもなお發散している「詠懷詩」に對して、「刺譏」探しということによって收束を見ようとすることの難しさを我々に見せてくれている。

それでは、どのように「詠懷詩」に立ち向かつていけばよいのだろうか。その一つの方法として、この「刺譏」探しというような「從來の、詩の送り手の方へさかのぼろうとする方向とは逆に、受容する側に詩がもたらす効果の方へ注目して」⁽⁵⁾讀んでいくことがある。本稿は、「徘徊」と「逍遙」という言葉が、「詠懷詩」八十二篇の中で讀者にどのようなイメージを與えているかということを考えてみようとするものである。

徘徊と逍遙（森田）

一

徘徊と逍遙、これら二つの言葉は、我々にも普段馴染みがあるものである。この言葉は、我々に對してどのような感じを與えているだろうか。たとえば、「男が夜の街を徘徊する」というと、別に奇妙なことではなく、自然なイメージを與えてくれるが、同じ現象を「男が夜の街を逍遙する」と述べたとすると、どうにも奇妙な感じを受けることになる。深夜あてでなく歩き回る青少年達にマスコミは「深夜徘徊族」などという呼び名を付けたりにしているが、この普通に納得されうる名稱も、「深夜逍遙族」では人に與えるイメージが全く異なってしまう。一方、坪内逍遙は、坪内徘徊では號にならない。

このように、かなり違ったイメージを我々に與えてくれることが多い言葉なのだが、今手もとにある國語辭典を試みに引くと、徘徊には「あてもなく歩き回ること。うろつろと歩き回ること」とあり、逍遙に對しては「あちこちをぶらぶら歩くこと。散歩。そぞろ歩き」⁽⁶⁾とある。この辭典

の説明から考えると、兩者に共通して、目的もなく歩くということがある、違ふ點は、その歩き方の様子が一方は「そぞろ歩き」と形容され、一方は「うろうろ」と形容されることであるのがわかるが、このような説明からは、これら二つの言葉の感じの違いは、はっきりとつかみきれないようにも感じられる。

しかし、考えてみれば、もともととはっきりと區別して説明されるものではないのかもしれない。例えば、『明治本徘徊』という書名と『明治本逍遙』という書名とは、その差はさほどはつきりと感じ取れないように思う。徘徊も逍遙もどちらも歩き回ることとしてとらえられて間違いないようだが、同じような運動を表していてもなお、その語が背負う気分は時にその差をはっきりと人に與えもし、また時にその差をぼんやりともさせる。これが現在これらの語に付與されている意味の様相なのであろう。

徘徊も逍遙も疊韻の語であり、オノマトペである。その本來の性質からして、これらの言葉に對して個別に明晰な解析を加えることは難しいであらう。また、辭典にしても、

類義語辭典のようなものでない限り、よく似た言葉の間にある差異を明らかにしようとする意圖がもととないものであるから、二つの言葉を比較することなく、それぞれの一方に對してのみ注意が向けられて與えられた辭典の解説がそれぞれの説明に明瞭な差を與ええぬのもやむを得ないということにもなるう。

我々が中國の古典作品を読む時のことを考えてみよう。

その長い時間にわたる作品世界に現れる「徘徊」「逍遙」という言葉を今の感覺でもって捉えてもそれは的外れにならぬ場合が多いのは、今の言葉がそれら古典作品にある言葉と斷絶して存在するものでない以上は自然であらう。

例えば、曹植の「雜詩」(古詩)⁽⁸⁾、

1 攬衣出中閨 衣を攬りて中閨を出て

逍遙步兩楹 逍遙して兩楹に歩む

を読む時、この詩の解釋としては、ここの第2句の逍遙は、徘徊と逍遙が共通して持つ歩き回るといふ運動だけのイメージを擔っており、徘徊と區別される時に逍遙が持つイメージは持たず、また、『文選』(卷十六)司馬相如の作とさ

れる「長門賦」、

夫何一佳人兮步逍遙以自虞 夫れ何の一佳人か、

歩みつ逍遙しつ以て自ら虞おもばかる

を読む時、この賦に展開される内容からは、ここに現れる逍遙も今の曹植の「雜詩」の例と同じく、歩き回るといっだけの言葉として捉えられる。この二例にある逍遙は、徘徊との差異を讀者に訴えかけない。一方で、それぞれ他の言葉にない氣分を擔つて活躍する徘徊や逍遙も多くみられるのである。今だけの話ではないのである。これらの言葉が流れ傳わつて現在に至るその途上においても、よく似た言葉としてありつつなお差異を持つというこの様相は見られたであろう。

ただ、言葉は變化するものであり、徘徊と逍遙にあるよく似た言葉としてありつつなお差異を持つという様相もまた變化し續けてきたであろうから、現在のその様相に萬全の信頼をおいて過去にあったその言葉を考察しようとすることはできないであろう。

本稿は、徘徊と逍遙という二つの言葉のありかたの歴史

徘徊と逍遙（森田）

的な變化やもしくはある時點においてのありかたを考察しようとするものではなく、「詠懷詩」の中においてこれら二つの言葉が讀者に對して鮮明に異なったイメージを與えているということを考えようとするものであるから、前提作業として確認しておくことは、今見た、よく似た言葉であつてなお差異を持ちつつこれらの言葉が生きてきたのだということの了解で充分であろう。

二

さて、次に「詠懷詩」の中に現れる徘徊と逍遙を一通り眺めておくことにしよう。

『文選』に收められる「詠懷詩」十七篇を眺めるとき、その十七篇には多くのさまよう阮籍の姿が見出される。これと比べてみると、八十二篇全體においては、さまよう阮籍の姿は少々希薄な感じがする。

ともかく、『文選』が摘録した「詠懷詩」をひもといてみれば、その第一首より讀者は讀み進めてゆくことになる。⁽⁹⁾

1 夜中不能寐 夜中寐ぬる能はず

起坐彈鳴琴 起座し鳴琴を彈ず

薄帷鑒明月 薄帷に明月は鑒り

清風吹我襟 清風は我が襟を吹く

5 孤鴻號外野 孤鴻は外野に號び

翔鳥鳴北林 翔鳥は北林に鳴く

徘徊將何見 徘徊して將た何をか見ん

憂思獨傷心 憂思して獨り心を傷ましむ

黃節はこの詩に注して「諸家は又多く此の篇を以て八十二篇の發端と爲す」と記す。また、吉川幸次郎氏「阮籍の

「詠懷詩」について」においては、その論のまず最初に、

「詠懷詩」のその「詩の性質を例示するために」として掲

げ、同氏の「阮籍伝」¹¹⁾は、その論の最後に「もし中国の詩

のうち、最も調子の高いものはと問われるならば、私はち

ゆうちよなく答えるであらう。それは阮籍の「詠懷詩」八

十二首であると」と結び、それに續けてこの第一首を象徴

的に置いている。

つまり、黃節の言うように凡そ諸本がさまざまな順序で

「詠懷詩」を排列するにもかかわらず、この『文選』第一

首をその一番目に置くということは、吉川氏が述べるように、この詩が多くの人々によって「詠懷詩」全體の性質を最もよく表していると捉えられ、それを代表する一篇として認識されて來たためであるに違いない。それはまた、『文選』が編まれた時に既にそうであったのだろう。

さて、まさしくこの第一首一篇の中にさまよう阮籍の姿がある。そしてそのさまよいは、7句目に現れる徘徊という言葉によって表現されている。それでは、その他に徘徊という言葉が登場する詩を探してみれば、『文選』に收められたものは、第七首、

7 徘徊空堂上 徘徊す空堂の上に

怵怛莫我知 怵怛して我を知るもの莫し

さらには第十六首、

1 徘徊蓬池上 徘徊す蓬池の上

還顧望大梁 還顧して大梁を望む

以上、第一首とあわせて十七篇中三篇がある。一方、

『文選』に收められなかったものの中には、第六十四首、

5 逍遙九曲間 九曲の間を逍遙すれど

徘徊欲何之 徘徊して何くにゆかんと欲す

この一篇がわずかに見られるばかりである。

全部で四篇に徘徊という言葉は現れるが、その四篇のうち三篇が『文選』に採られたということ、しかも今見られる八十二首の中で、直接徘徊という言葉が現れる詩は、このように少ないにもかかわらず、「詠懷詩」全體を代表するイメージとして徘徊する阮籍の姿が強く意識されて來たことにまず注意しておこう。

さて、この論で取り上げるもうひとつの逍遙という言葉が今挙げた第六十四首に見えている。これについても同様に「詠懷詩」の中から拾い挙げてみると、『文選』に採られているものは、第二首、

1 二妃遊江濱 二妃は江濱に遊び

逍遙順風翔 逍遙して風に順ひて翔ぶ

この一篇のみである。

一方、『文選』に採られなかったものは、第二十三首、

5 仙者四五人 仙者四五人

逍遙宴蘭房 逍遙して蘭房に宴す

徘徊と逍遙(森田)

また、第二十四首、

3 逍遙未終宴 逍遙して未だ終宴せざるに

朱陽忽西傾 朱陽は忽ち西に傾く

第三十六首、

1 誰言萬事難 誰か言ふ萬事難しと

逍遙可終生 逍遙して生を終ふ可し

第五十八首、

5 非子爲我御 非子は我が爲に御し

逍遙遊荒裔 逍遙して荒裔に遊ぶ

これらと先の第六十四首、あわせて五篇がある。

全體として六篇に現れることからみると、逍遙という言葉が現れる詩は、『文選』の編者に特に強い印象を與えなかつたようである。

しかし、ここで注意したいことがある。『晉書』の阮籍傳によると「或ひは戸を閉ちて書を視、月を累ねて出でず。或ひは山水に登臨し、日を経て歸るを忘る。羣籍を博覽し、尤も莊・老を好む」とあることからわかるように、阮籍は、老莊の學に傾倒した人であつた。そして、この傳にお

いて「莊老」となっているように、唐以前の、「老子」よりも「莊子」の方を重視する當時の様子がうかがえるのである。¹³

ならば、阮籍が見た『莊子』は郭象による整理が未だ行われていなかったにせよ、今見える『莊子』の卷頭第一章に名付けられる「逍遙遊」という言葉、その書物の内容と共に、この充分に魅力的・象徴的な篇名をも、阮籍は勿論強く意識していたに違いないだろう。彼が詩の中にその言葉を置く時にも、その意識は働いていたであろうし、さらには、「詠懷詩」八十二篇全般にわたって多く見られる神仙・傳説の世界を色濃く感じさせる言葉を用いた詩群と大きな關連を持っているものでもあろう。

しかし、これら逍遙を含む詩が『文選』の編者によって軽く扱われた原因のひとつは、『文選』が神仙的な要素の多い作品をことさらに排除する傾向にあることと言えるだろうが、またもうひとつの可能性としては、徘徊という言葉を含む詩群の印象が強烈であるのとは對照的に、逍遙という言葉を含む詩群は、特に「詠懷詩」のみに特徴的なも

のではないと感じられ、強い印象を與え得なかったからではなからうか。

もしくはこういうことであろうか。徘徊という言葉が置かれた詩をもう一度眺めてみると、それら全てについて、その徘徊という運動が阮籍自身の運動であることに氣付く。一方、逍遙の方についてみれば、第二十四、五十八、六十四首は阮籍自身の運動であるが、残りの三篇は、そうとは言えないものや、そう言い切れないものである。すなわち、徘徊の方がより多く阮籍自身の姿を讀者に與えてくれること、さらには、『莊子』逍遙遊篇において「彷徨乎^{よらわれなきところ}もて其の^{かたわら}側に無爲い、逍遙^{こころにまか}乎^{あそ}せて其の下に寢臥^{ねそべ}らざるや」とあるように、逍遙という言葉は、何らかの運動であるには間違いないにせよ、むしろその運動によって氣分や感じを出す、さらには、その感じだけを背負って修飾する働きだけを擔う言葉になってしまっているがごとき場合もあるものであって、「詠懷詩」の中の逍遙についても、阮籍もしくは何者かである運動の主體と逍遙というその運動自體の結合が強く現れず、いつそうその運動の行爲者の―特に問題

となるのは勿論、阮籍の「姿がはつきりしないことになる。そして、阮籍という作者の印象が強烈な「詠懷詩」を読む時には、その作者の姿を思い描かせ易い徘徊という言葉を含む詩の方が印象が強くなるからであらうか。

このように、文選の編者をはじめとする様々の読者がいかに「詠懷詩」を受容したかということをさらに考えていくことも興味深いことであるが、本稿の意圖を越えるので、ここでは徘徊という言葉を含む「詠懷詩」第一首が、多くの読者達に強いインパクトを与えてきたことが注意されることの確認にとどめて、「詠懷詩」の世界の中へ入っていくことにしよう。

三

何焯は「詠懷詩」の源を「離騷」におくが、「詠懷詩」の讀者に「離騷」を読むに似た感じを抱かせるとすれば、そのひとつの要因は、「詠懷詩」のうち逍遙という言葉が登場する詩篇が與えるイメージによるであろう。

さて、その逍遙という言葉を思い浮かべる時、どうして

徘徊と逍遙(森田)

も思いが及んでしまうのは、『莊子』の逍遙遊篇であろう。本稿は、この言葉が讀者にどのようなイメージを與えるだろうかということを考えようとしているのだが、當然問題とされるべきその讀者とはいったいどのような讀者であるのかということには全く觸れなかった。まさに理想的な讀者たる人々を假想して論を進めざるをえないのだが、そのような讀者にあっても『莊子』の逍遙遊篇に思い及ぶことは有り得ることとしてよいであらう。

『經典釋文』は、逍遙遊、遊の字の下に「逍遙遊というのは篇名。意味は、ほしきままにしてこだわらず、よろこびやわらぎくつろぐことに取る」と記す。また、

何不樹之於無何有之鄉、廣莫之野、彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢臥其下

福永光司氏が「何ゆえに之を無何有き郷、廣莫き野に樹えて、彷徨乎もて其の側に無爲い逍遙乎せて其の下に寢臥らざるや」と訓讀を試みているこの逍遙について、郭慶藩は「逍遙は説文によれば消搖とすべきだ。」とし、さらに王晉夜を引いて「消搖というのは、調暢悅豫の氣持

ちである」⁽⁹⁾と記す。『莊子』には、このような意味あいの逍遙がよく登場する。(大宗師・天運・達生篇等)

さて、『莊子』に關係して逍遙という言葉を考える時、阮籍の生きた時代とからんで今ひとつ注意される注釋がある。『文選』(卷十三)潘岳の「秋興賦」に、

逍遙乎山川之阿 山川の阿に逍遙し

とあるところに李善は注して、司馬彪を引き「言ふところは、逍遙無爲たる者は能く大道に遊ぶ」と記す。司馬彪はその傳によれば惠帝の末年すなわち西曆三〇六年に六十餘りの歳で亡くなっているから、その時代は阮籍と重なりつつやや遅れるのであるが、『莊子』に現れる逍遙という言葉に對する當時の感覺が窺える。つまり、阮籍にあつても、逍遙という言葉には「大道に遊ぶ」といったような氣分をもつて存在していた可能性があるということなのである。ただそれは、あくまでその可能性があるというだけであるから、以下の論に何らの根據も與ええないものであるけれど。

さて、「詠懷詩」に現われるこの逍遙という言葉をなが

めていこう。

1 二妃遊江濱

逍遙順風翔

交甫懷環珮

婉變有芬芳

5 猗靡情歡愛

千載不相忘

傾城迷下蔡

容好結中腸

感激生憂思

10 萱草樹蘭房

膏沐爲誰施

其雨怨朝陽

如何金石交

一旦更離傷

二妃は江濱に遊び

逍遙して風に順ひ翔ぶ

交甫は環珮を懷にし

婉變として芬芳有り

猗靡として情は歡愛し

千載 相ひ忘れず

傾城 下蔡を迷はせ

容好は中腸に結ぶ

感激して憂思生じ

萱草を蘭房に樹う

膏沐誰が爲に施す

其れ雨ふれと朝陽を怨む

如何ぞ金石の交はりの

一旦にして更に離傷するや(第二首)

男の愛情を受け入れる前の女神は江濱に遊び、風と飛ぶかのように逍遙する。しかし、女神すらも男の心變わりによって悲しみの世界に引きずり降ろされる。逍遙とは、人

間に満ち満ちる愛憎とは無縁な存在であった時の「二妃」の運動なのである。それは、人間を超越して存在する者が、低き人間の地と隔たること遠い高みに風と共に舞う運動である。そして、それは解放された空間と時間の中にある運動として感じられる。

このように、人間世界からかけ離れた世界、例えば仙界にある者達の運動に逍遙は現れる。「詠懷詩」の中で、阮籍のその仙界へのあこがれを一篇全體に歌いあげる第二十三首にも逍遙は現れる。

1 東南有射山 東南に射山有り

汾水出其陽 汾水はその陽より出づ

六龍服氣輿 六龍は氣輿を服ひぎ

雲蓋覆天綱 雲蓋は天綱を覆ふ

5 仙者四五人 仙者四五人

逍遙宴蘭房 逍遙して蘭房に宴やすんず

寢息一純和 寢息は一に純和に

呼吸成露霜 呼吸は露霜を成す

沐浴丹淵中 丹淵の中に沐浴し

徘徊と逍遙（森田）

10 炤耀日光 日月の光に炤耀す

豈安通靈臺 豈に通靈臺に安んぜんや

游瀟去高翔 游瀟し去りて高く翔じんかんばん

ここに現れる逍遙は人間の束縛より離れた仙者の状態をよく表現している。そして、この逍遙という言葉から、讀者は仙者の「調暢悅豫」した氣分を強く受け取るのである。このような氣分を持つ逍遙は、例えば、『楚辭』九歌「湘君」に、

聊逍遙兮容與 聊か逍遙し容與す

とあるところにも見られ、王逸の注が「逍遙は遊戲なり」と記すのも参照されるが、これもくつろぎやわらぎ安んじ楽しむ様子を表わす語として逍遙を捉えているようである。

さて、今あげた二篇の中に現れた逍遙は、いずれも人間と離れた超越した存在者達が、我々低き所にある者が望みようもない解放感を伴って在る運動・状態を表しているのだが、我等讀者は、我等と共に人間の低きにある作者の視線をその詩の外部に見いだすこととなる。第二十三首にお

いて詩中に展開する情景を作者はその詩の世界の外から、あこがれをもって歌い上げてゐる。そして彼自身も高く翔け上がりたいと願うのであり、作者は自分をその詩の中にある世界へ上昇させたいとするのだが、一方、第二首の方ではどうであつたろうか。

人間に溢れかえる愛憎の中へ女神は無残にも引きずり下ろされる。第二十三首においては作者があこがれている高みにあつた女神が、作者のいる低き地に引きずり下ろされるのを作者の視線は見つめている。

この第二首と比べてみるべき詩が第十二首である。そこに登場する男女は、自分達の愛だけは、女神をもその高みから引きずり下ろしてしまふような信頼できない愛ではないのだとし、この人間を翔び立とうと願う。

1 昔日繁華子 昔日の繁華の子

安陵與龍陽 安陵と龍陽となり

天天桃李花 天天たる桃李の花

灼灼有輝光 灼灼として輝光有り

5 悅懌若九春 悅懌すること九春の若く

磬折似秋霜 磬折すること秋霜に似る

流盼發姿媚 流盼は姿媚を發し

言笑吐芬芳 言笑は芬芳を吐く

携手等歡愛 手を携へて歡愛を等しくし

10 宿昔同衣裳 宿昔衣裳を同じくす

願爲雙飛鳥 願はくは雙飛の鳥と爲り

比翼共翱翔 翼を比べて共に翱翔せん

丹青著明誓 丹青もて明かなる誓ひを著はし

永世不相忘 永世相ひ忘れず

ここに現れる翱翔という言葉は、『詩經』檜風「羔裘」の詩「羔裘もて翱翔す」という句にも見えるが——この句は「羔裘もて逍遙す」という句と對になって現われており、翱翔と逍遙が同義の言葉の言い換えとして使われていて、箋はこの句について「翱翔はなほ逍遙なり。これ翱翔もまた游燕の義」と述べる——その翱翔と同じように逍遙とよく似た氣分を持つものである。この第十二首の詩の中に、我々は、作者が自分と同じあこがれを持つ人間にある者を歌うのを見るのだが、第二首において作者は既にこの第十

二首の男女に對しての絶望的な解答を與えてしまつてゐるとは言えないだろうか。

さて、第二十三首において、詩の中の世界を外から眺める作者の視線が感じられると言つたが、そこに作者のあこがれが感じられるのは、あこがれというものを持つ者のみが可能な、想像の裡での上昇が感じ取れるからである。詩の中の仙者達は人間と遠く離れた存在であるが、あこがれによって上昇した作者の視點は、想像の裡の高みにあつてその情景を歌つてゐるのである。とは言え、11・12句に現れる作者の感嘆によつて、讀者はその視線の持ち主が現實の中ではやはり低き人間にあるのだということを納得させられるのである。

ところが、その想像の裡に上昇している作者の視線とその詩の世界の中とに交流が起きそうな詩がある。つまり、それほどまでのあこがれを作者が持つてゐることを讀者に印象づける詩であるが、それは次のような詩である。

1 西方有佳人 西方に佳人有り

皎若白日光 皎やけきこと白日の光の若し

徘徊と逍遙（森田）

被服織羅衣

被服は織羅の衣

左右珮雙璫

左右に雙璫を珮ふ

5 修容耀姿美

修容は姿美を耀かし

順風振微芳

風に順ひて微芳を振る

登高眺所思

登高して思ふ所を眺め

舉袂當朝陽

袂を舉げて朝陽に當たる

寄顏雲霄間

顔を雲霄の間に寄せ

10 揮袖凌虛翔

袖を揮うて虚を凌ぎて翔ぶ

飄飄恍惚中

飄飄たり恍惚の中

流盼顧我傍

流盼して我が傍を顧る

悅懌未交接

悅懌するも未だ交接せず

晤言用感傷

晤言して用て感傷す（第十九首）

11句に至るまで、作者のあこがれの對象である佳人のようすがあこがれによつて上昇している作者の視線から描かれてゐる。その強いあこがれの視線に引き寄せられてであらうか、佳人はついに作者の方へその視線を向けてくれたかと思えたのである。しかし佳人の見るものは、ただ作者のかたわらであつて、作者自身ではなかつた。あこがれに

上昇した彼を、彼のあこがれの對象はついに認めてくれない。彼はその佳人と交わり、共に翔けることができない。

ついにまた、彼は感嘆の言葉を吐くよりないのであった。

この第十九首に逍遙という言葉は現れない。しかし、この佳人の運動の敘述によって讀者が思い浮かべるイメージは、第二首の二妃の運動と同様のものであらう。このように、これらの逍遙は、作者が強くあこがれるにかかわらず、想像の裡にだけしか見ることができない超越した存在者達の運動として現れている。だから、その運動は人間にある我々には不可能なもののごとくである。しかし、彼は、詩の中に彼自身を登場させ、逍遙の世界へと上昇させることはできるのであった。そこでは、作者は詩の内部の存在としてその視線を詩の世界の中に持ち込む。

1 危冠切浮雲

危冠 浮雲に切し

長劍出天外

長劍 天外に出づ

細故何足慮

細故何ぞ慮るに足らん

高度跨一世

高度して一世を跨ゆ

5 非子爲我御

非子は我が爲に御し

逍遙遊荒裔

逍遙して荒裔に遊ぶ

顧謝西王母

顧みて西王母に謝し

吾將從此逝

吾將に此より逝かんとす

豈與蓬戶士

豈に蓬戶の士と

10 彈琴誦言誓

琴を彈じ誦して言誓せんや

(第五十八首)

彼は詩の世界の中の仙界を逍遙する。今度は彼が瞳をめぐらせば西王母とでも「交接」できるのだ。今や自分自身があこがれの的であった逍遙できる身となった。しかしなお彼は飽くことを知らない。西王母にも暇を告げてさらにさらに逍遙し續けていく。そのような彼にとって、先程までの自分と同じ場に居る者である「蓬戶士」などはもう今や相手にできないとさえ言ってしまうのである。これは、詩の中に翔け上がってくる前の、現實にある作者自身の地平を否定してしまうことになるう。だが、詩の中の世界は10句をもって終了してしまうのだ。その終了とともに作者はその想像裡の逍遙から墜落してしまい、現實の中に「蓬戶士」と同じ地平にあって詩筆を握っている。讀者はその作

者の姿を強く感じ取ることになるだろう。

ここまで見てきたように、逍遙は現實から離れた超越した世界においてのみ行いうる運動であって、それはあくまでも空間からも時間からも解放された現實の内には存在しない自由な運動として讀者に感じ取られ、その結果、作者や我々讀者のいる現實と作者のあこがれの世界との間に横たわる絶望感を強く訴えかけてくる要因として有効に働いている。逍遙は、仙界と地上と、想像の裡と現實とを分け離す働きをよくしていると言えるだろう。

しかし、「詠懷詩」に現れる逍遙のうち、逍遙の場が今までの詩と異なり、想像の裡ではなく、現實の中において作者自身が行い、また行おうとしているものがある。

1 殷憂令志結

恍惚常若驚

逍遙未終晏

朱陽忽西傾

5 蟋蟀在戶牖

蟋蟀號中庭

殷憂 志を結ば令め

恍惚 常に驚くが若し

逍遙し未だ終晏せざるに

朱陽は忽ち西に傾く

蟋蟀は戸牖に在り

蟋蟀は中庭に號す

徘徊と逍遙（森田）

心腸未相好

誰云亮我情

願爲雲間鳥

10 千里一哀鳴

三芝延瀛洲

遠遊可長生

1 誰言萬事難

逍遙可終生

臨堂翳華樹

悠悠念無形

5 彷徨思親友

倏忽復至冥

寄言東飛鳥

可用慰我情

心腸未だ相ひ好まざるに

誰か云ふ我が情を亮かにすと

願はくは雲間の鳥と爲り

千里に一たび哀鳴せん

三芝は瀛洲に延ぶ

遠遊して長生す可し

誰か言ふ萬事難しと

逍遙して生を終ふ可し

堂に臨んで華樹に翳し

悠悠と無形を念ふ

彷徨して親友を思ひ

倏忽として復た冥に至る

言を東へ飛ぶ鳥に寄せ

用て我が情を慰む可し（第三十六首）

これらは、いずれも現實世界における逍遙である。第二十首、阮籍自身が逍遙している。その第3句、「晏」は或いは宴の意かもしれないが、いずれにせよ阮籍の逍遙はまだ終わらないのにもかかわらず現實の中の時間は容赦なく

進んで行く。つまり、ここで讀者は、逍遙という行動が現實の時間の流れから解放されねば行ふことのできない運動であることが重ねて了解されるのである。思えば、仙界における逍遙は「二妃」のごとく引きずり下ろされぬかぎり、いつまでも續いていくようなものではなかったか。そしてそのような状況の中で彼は、仙界・天空へ脱出する希望をうたう。さらにその希望に焦點を當てて詩を作れば、希望の先にある世界を外から見て描き出すと第二十三首となり、その世界へと詩の中で自分自身が逍遙しつつ描き出すと第十九首となるのであらう。

また第三十六首には、同じ生きて行くなら、逍遙して一生を終えようじゃないか、と樂觀的な言葉を吐いた後の反動が見られる。ここでは彼は自らの脱出願望はうたわれないが、沈んで行く心を慰めんと、天空を飛ぶ鳥に―それは彼には不可能な逍遙という行爲が可能であるかに思える存在であるが―言葉を寄せたいとうたう。逍遙して一生を終えようじゃないか、と言ってみても、それは所詮捨てぜりふであり、作者がいる人間の世にあっては望むべくもなく、

阮籍はただ天空を行く鳥を見上げるだけなのである。
さて、また第四十六首、

1 鸞鳩飛桑榆 鸞鳩 桑榆に飛び

海鳥運天池 海鳥 天池を運る

豈不識宏大 豈に宏大を識らざらんや

羽翼不相宜 羽翼相ひ宜しからず

5 招搖安可翔 招搖して安ぞ翔ぶ可けんや

不若栖樹枝 樹枝に栖むにしかず

下集蓬艾間 下は蓬艾の間に集まり

上遊園圃籬 上は園圃の籬に遊ぶ

但爾亦自足 但だ爾なるに亦た自足す

10 用子爲追隨 子を用いて追隨を爲さん

まさにこの詩は『莊子』逍遙遊篇、鵬を笑う鵲と學鳩との話を踏まえるとしてよいであらう。ここに現れる招搖は、海鳥『莊子』においては鵬の飛翔の表現であり、たとえ浮上はできるにせよ、地上の小さな己の世界に貼りついてゐる鸞鳩の浮上程度では招搖と呼ばれるには値しないかのようである。明らかに、海鳥は超越者としてあり、鸞鳩は低

きこの地にあるものとして現れている。その鷺鳩達、小人群れをなすといおうか、海鳥を見上げ相いかこつ、招搖（逍遙）なんてできないけれどここで楽しくやっているほうがいい、と。ここにある逍遙も、高みを行く超越者のみに許された運動として現れている。

さて、この第四十六首と并わせて考えるとおもしろい詩がある。第八首に、

11 寧與燕雀翔 寧ろ燕雀と翔ぶも

不隨黃鵠飛 黃鵠に隨ひて飛ばず

黃鵠遊四海 黃鵠は四海に遊ぶも

中路將安歸 中路將た安にか歸らん

という表現が見える。第四十六首は、解釋が難しいけれど、作者はどうにも苦々しくもつには學鳩に相槌を打っているかのようである。しかし、第八首は、はっきりとこの低き地の仲間とともにある方を選ぶと言う。今、自分自身が逍遙できないという絶望の内にあってもなお想像の内に黃鵠と同じ高みに身を置き、その黃鵠の絶望を想像している阮籍の姿をもここに見つけることになったのである。地上

徘徊と逍遙（森田）

の束縛された小さな世界から見上げる大鳥の飛翔は確かに雄大である。しかし、その黃鵠の世界も、黃鵠自身の身に立ってみれば、己を束縛し、行き場なきものとして立ちだかってくる世界ではなからうか。ついにここに、讀者は、あこがれなどという言葉をもってして彼の高みに對する思いを語ることの單純さを思い知らされることになるのだ。そう思うと、振り返って第五十八首、西王母に暇を告げ、阮籍はどこへ逝こうとするのだったろうか。「顧謝西王母、吾將從此逝」という二句と今の第八首の最後の二句「黃鵠遊四海、中路將安歸」は、相重なって見えてくるばかりにもなってしまうのである。

「詠懷詩」の逍遙に關わり深い詩を眺めると、そこにはこのように阮籍の様々な視線が入り亂れていて、肯定と否定と、あこがれと諦念とが立ち代わり現れる。そして、結局讀者に深く殘されるのは、作者の絶望感だけであるかのようである。その中で、逍遙という言葉は、現實を超越した存在者にのみ可能な運動として現れ、「詠懷詩」に在る高みと低き地との隔たりを讀者に印象づける働きをしてい

ると言えるだろう。

四

さて、それでは前に述べたように、「詠懷詩」にあつてはその運動の主體がすべて阮籍自身であるという大きな特徴をもつ徘徊について、やはりまずその第一首から見っていくことにしよう。(第一首は前掲、43ページ下段)

眠られぬ夜、月の光、涼しく吹き寄せて来る風、ふと琴をつまびいてゐる自分、心中の不安、寂しさを更にかきたる夜の情景、ついにはその情景の中をさまよつてゐる孤獨。第一首のこのようなモチーフは、「詠懷詩」以前の五言詩にもよく見られるものであつた。それは例えば、王粲の「七哀詩」(荆蠻非我郷、何爲久滯淫)や曹丕の「雜詩」(漫漫秋夜長、烈烈北風涼)などがその例としてあげられるだろう。しかし、それらの詩は、このようなモチーフを用いて、まさにその己の心を不安にする原因をうたいあげることが目的にする。王粲の「七哀詩」では旅の不安、曹丕の「雜詩」では故郷を思う心が、つまりは詩の主眼なの

であつた。ところが、阮籍の詩はそうではない。彼は、前人達が用いた徘徊というモチーフ自体をうたいあげてゐる。彼は、この第一首に於いては餘分なものを一切そぎとつた。季節の説明や情景の詳しい描寫などはなくなったが、そのためいっそう琴の音も月光も清風も號びも澄明に、象徴的に感じとられるようになり、その原因が提示されない作者の不安感は、提示されないが故に讀者の中でいっそう増幅されることとなつた。あまりにも清明な情景の中に徘徊する阮籍の姿が浮かび上がる。

徘徊という言葉が今述べたようなモチーフの中に使われ始めたのは、今見る限りでは、時代ははっきりと確定出来ないにせよ、「古詩十九首」からであろう。その後、このような詩が建安期を中心によく現れることとなり、徘徊という運動を活用するモチーフは典型として完成された観がある。

先の曹丕の「雜詩」について鄭振鐸は「しかし、もしちよつと注意して讀んでみれば、この雜詩が全く古詩十九首をまねたものであることがすぐわかる。ただ風格が似てい

るだけではなく、また情感也非常に似ているのだ」と述べる。鄭氏の考えでは、建安の頃には「古詩十九首」をまねて詩を作ることがなかなか盛んであり、そのような「古詩」の模擬詩は皆、「雜詩」の名を題としているとするが、その是非はともかく、この徘徊のモチーフに限って言えば、「古詩」のうちの次の一篇を意識することは間違いないだろう。

1 明月何皎皎 明月何皎皎たる

照我羅床幃 我が羅の床幃を照らす

憂愁不能寐 憂愁して寐ぬる能はず

攬衣起徘徊 衣を攬り起ちて徘徊す

5 客行雖云樂 客行は樂しと云ふと雖ども

不如早旋歸 早く旋歸するに如かず

出戶獨彷徨 戸を出でて獨り彷徨す

愁思當告誰 愁思當に誰に告ぐべき

引領還入房 領を引き還りて房に入れば

10 淚下沾裳衣 淚下りて裳衣を沾す

この詩（『文選』卷二十九）、旅のうたであることは説明されるが、「詠懷詩」第一首と同じ程に冗長さが無い。徘徊の

徘徊と逍遙（森田）

モチーフがここから出るとすれば、「古詩」より「詠懷詩」に至るまでの詩人達がこのモチーフにさらに説明を加え、詳細さを指向したのに對し、阮籍はその逆の方向を指向したのだとも言えるだろう。

最初に述べたその第一首がおよそ諸家によって「詠懷詩」の巻頭に置かれるその印象の強さは、まず何をいっても、このように讀者に純粹に投げ出されている徘徊する阮籍の姿にあるのだと、やはり私には思われる。そして、阮籍が徘徊のモチーフに加えた削除の指向は、不安の源を明示すれば危険がその身に及ぶからというように「刺譏」を匿すためではなく、徘徊する己の姿を見つめざるを得なかったということにこそよるのだと私は考える。

さて、徘徊について、さらに眺めていくことにしよう。

「詠懷詩」第一首においては、徘徊の場が何處にあるかさえ削られてしまっている。「戸外に出て徘徊する」などといった説明は一切ない。そしてまた、「部屋に戻って涙を落とす」といったような徘徊という運動に對する終止符も詩の中には與えられない。讀者がここに感じ取るのは、不

安であろうか、苦惱であろうか、また絶望であろうか、ともかく何らかの深い思いに眠りにつけず、ゆつくりと歩み續けている作者の姿である。その運動は、非常な閉塞感を伴った場で行われているように感じ取られ、決して廣々とした解放された気分の中に行われているとは感じ取れないだろう。そして、苦惱や不安といった思いがなかなか斷ち切れないものであるのと同じく、この運動も詩中において終りを告げられぬまま、讀者の胸中に繼續されていくように感じられないであろうか。

一方、「孤鴻號外野、翔鳥鳴北林」という二句は、空間の中からただ二點を抽出して描寫し、世界の擴がりを表現する。鳥の叫びは無限の夜の闇の中へ擴散していくのだ。その闇の擴がりの中で徘徊は續けられていく。闇の中に世界は無限に擴がっているであろう。しかし、徘徊という運動は、作者の周囲の閉ざされた空間を浮かび上がらせる。徘徊し續ける限り、阮籍はどこにも逃げ出せず、やはり徘徊し續けるよりほかないがごとくに感じられる。

「詠懷詩」第十六首の徘徊もこれと似る。

1 徘徊蓬池上	徘徊す蓬池の上
還顧望大梁	還顧して大梁を望む
綠水揚洪波	綠水は洪波を揚げ
曠野莽茫茫	曠野は莽として茫茫たり
5 走獸交橫馳	走獸は交ごも橫馳し
是時鶉火中	是の時鶉火は中し
日月正相望	日と月は正に相ひ望む
朔風厲嚴寒	朔風は嚴寒を厲しくし
10 陰氣下微霜	陰氣は微霜を下す
羈旅無儔匹	羈旅 儔匹無く
俛仰懷哀傷	俛仰して哀傷を懷く
小人計其功	小人は其の功を計り
君子道其常	君子は其の常を道とす
15 豈惜終憔悴	豈に終ひに憔悴するを惜しまんや
詠言著斯章	詠じて言に斯の章を著さん

蓬池のほとりを徘徊する阮籍。そして、その圀りに擴がる曠野、空間の擴がりを自由な運動で表現する獸や鳥達。この廣い世界―現實―のそのあらゆる場所が、行こうと思え

ば行ける所なのかもしれない。しかし、その到達可能ないかなる場所へ辿り着こうとまた續く徘徊。世界が廣ければ廣いほど、徘徊という行爲だけが許されている存在者としての心は、ますます壓迫され閉じ込められていく。そしてさらに、その徘徊する時間も死の時へ向かって無限に延長されていくのである。

さて、第七首に登場する徘徊は、第一首や第十六首と違って世界の擴がりを強調しない。空堂という閉された空間だけが提出される。

1 炎暑惟茲夏

炎暑惟れ茲の夏

三句將欲移

三句にして將に移らんと欲す

芳樹垂綠葉

芳樹は綠葉を垂れ

青雲自逶迤

青雲は自ら逶迤たり

5 四時更代謝

四時は更ごも代謝し

日月遞差馳

日と月は遞ひに差馳す

徘徊空堂上

徘徊す空堂の上

怊怛莫我知

怊怛して我を知るもの莫し

願覩卒歡好

願はくは歡好を卒ふるを覩て

徘徊と逍遙（森田）

10 不見悲別離 悲しき別離を見ざらんことを

この詩においては世界の擴がりは強調されていない。徘徊の場も空堂としてはつきりと提示されている。ただ、この詩によって印象が強められるのは徘徊という運動に伴う時間のイメージであろう。この詩においてその運動の終止符はやはり與えられていない。作者の徘徊はまた果てしなく續いていくように感じられる。一方、その詩の冒頭は、推移していく時間を歌っているのであるが、時間の推移とはすなわち人生の短さに對する意識を喚起するものであろう。このような敘述の後に現れるこの果てしなく續く徘徊という運動に讀者がつきあたれば、兩者の反撥する性質が互いに強調しあう結果を生むであろう。

また、振り返って第一首や第十六首を見た時のことを考えると、徘徊という言葉自體が現れなくても、徘徊する阮籍が浮かび上がってくる詩群が存在することになる。第一首にあったのと同じように、世界の擴がりを表現するために鳥や獸達の擴散していく運動をうたい、地をさまよう己の姿を見つめる作品がそれである。例えば、第九首（歩出

上東門、北望首陽岑」、第十一首（湛湛長江水、上有楓樹林）、第十四首（開秋兆涼氣、蟋蟀鳴床帷）、第五十四首（夸談快憤懣、情慵發煩心）などが挙げられるだろう。そしてまた第十七首もその一例であるだろう。

1 獨坐空堂上 獨り坐す空堂の上

誰可與親者 誰か與に親しむ可き者ぞ

出門臨永路 門を出でて永き路に臨めど

不見行車馬 行く車馬を見ず

5 登高望九州 登高して九州を望めば

悠悠分曠野 悠悠として曠野分かたる

孤鳥西北飛 孤鳥は西北に飛び

離獸東南下 離獸は東南に下る

日暮思親友 日暮れて親友を思ひ

10 語言用自寫 語言して用て自ら寫ぐ

門を出てさまよい、登高してさまよう。西北へ東南へ世界の擴がりを主張する獸達。しかし、この世界は、徘徊のみを己に許す。もはや運動ということさえ問題なのではない。空堂の上に坐すことも「徘徊す空堂の上」（第七首）と何ら

變わりのない徘徊なのである。

このように、「詠懷詩」に現れた徘徊は、深い思いに囚われた作者のその運動の場から抜け出せることなく果てしなく續けられていく運動として、そのすべてが現れる。それは、現實の中のこの低き地において行われるものであった。

五

阮籍の「詠懷詩」を読む時、讀者は徘徊という言葉から逃げ出せない現實の閉塞感を感じ取る。また、その言葉がいつも孤獨なる阮籍自身の運動として現れるために、「阮籍の詠懷詩」を読む者達はいっそう印象深くこの言葉を受け取ることになるであろう。

一方、逍遙はこの現實から離れた、超越した世界の中でのみ可能である運動として感じられた。阮籍にとって、逍遙とは結局彼の想像の裡においてのみ求め得るものであった。そして逍遙は、彼が想像から醒めることによって、また、希求することから立ち返ることによって、浮游する場から

墜落し、終了せざるをえぬものとしてあった。しかし、徘徊は、阮籍が現實の中に低き地に縛られて行っている運動であり、孤獨な永遠に醒め續けている終わりなき運動としてあったのだった。

さらに、逍遙という運動を想像の裡に見つめる作者の視線は、時にその想像の高みから仙界を眺めたり、時に自らが詩の中に仙界へと翔け上がったりと、さまざまに揺れ動いたのであったが、徘徊を見つめる阮籍の視點には、逍遙の時のような移動が見られなかった。徘徊という行爲を見つめる阮籍の目は、現實を直視する目であり、現實世界を生きる、つまりこの世を徘徊する自分自身を見つめるより他ない視線だったからだ。

このように徘徊とは、見方によってプラスとなったりマイナスとなったりしない絶對的な地平におけるさまよいなのであり、「悲しみ有れば則ち情有り、悲しみなければ亦思ひなし」(第七十一首)とうたう阮籍が徘徊しつつ抱えている思いとは、存在するもののすべてにある悲しみというよりは、徘徊し續ける己自身を見つめる目を、つまり、

徘徊と逍遙(森田)

そのように存在すること自體の悲しみを見つめる目を持ち得てしまったことからの悲しみであると感じる。だから、終わりなき徘徊のうちに見るものは、徘徊する己であり(第一首)、徘徊しつつたどりつく所も徘徊しているその己の場、現實という絶對的な地平を死に到る迄さまよい續ける單獨者たる自分自身という場なのである(第六十四首)。

そして、「詠懷詩」の讀者も、さまざま阮籍を見つめる彼自身の視線に操られるように、その視線を阮籍の視線に重ねて、阮籍のさまよう姿を見、またいつしかさまよう己自身の姿を見つめさせられていることに氣付くのである。

注

(1) 傳は『晉書』卷四十九に見える。二一〇年は建安十五年、二六三年は景元四年。

(2) この篇數については、吉川幸次郎「阮籍の詠懷詩について」(『吉川幸次郎全集』第七卷、一九二ページ)にまとめられている。そこでも觸れられている四言詩の「詠懷詩」は、たとえば黃節による『阮步兵詠懷詩註』(人民文學出版社)に、十三篇が收められるが、今は長く多くの人々に親しまれてきた「詠懷詩」という世界について考えるということで、四言

詩については措いて觸れないこととする。

- (3) 『日本中國學會報』第十集（一九五八）榮報所收、一海知義「雜詩について」。（一五〇ページ）

- (4) 嗣宗、身仕亂朝、常恐罹謗遇禍。因茲發詠、故每有憂生之嗟。雖志在刺譏、而文多隱避、百代之下、難以情測。故粗明大意、略其幽旨也。

- (5) 川合康三「阮籍の飛翔」（『中國文學報』第二十九冊）

- (6) 『岩波國語辭典』第二版による。參考の爲に、『現代漢語詞典』を見ると、「徘徊：①在一个地方来回地走。②比喻犹疑不决。」「逍遙：没有什么约束、自由自在。」と記す。

- (7) 『詩經』「清人」の「河上乎逍遙」の句について、陳奐は『詩毛氏傳疏』（卷七）に「釋文（毛詩音義上）、逄本又作消、逄本又作搖。說文新附（二篇下走部）、逍遙、徐鉉等云、詩只用消搖、此二字、字林所加、今字消搖通作逍遙。」と記し、また、『文選』（卷八）司馬相如、「上林賦」の「迴車而還、消搖乎襄羊。」（車を迴らせて還る、消搖乎として襄羊す）の「消搖」を六臣注本は「招搖」に作る。王念孫『廣雅疏證』（釋訓卷六上）はまた「逍遙、徬徨也。疊韻之轉也。……檀弓作消搖、楚辭離騷、聊逍遙以相羊、王逸注云、逍遙相羊皆遊也、逍遙一作須臾、羊一作伴、史記司馬相如傳、招搖乎襄羊、索隱、郭璞曰、襄羊猶彷徨也、漢書作消搖乎襄羊、文選李善本作消搖乎襄羊、五臣本作招搖乎徬徨、竝字異而義同、開元占經石氏中官占引黃帝占云、招搖、尙羊也、尙羊與徬徨古亦

同聲、或作徬徨、……と述べ、用字は異なっている意味は同じであるとする諸字がある。これらは用字や音に異同があるものの、同じ一群の言葉と考えてよいだろう。

逍遙：逍、相邀切、下平四宵 遙、餘昭切、下平四宵

消搖：消、相邀切、下平四宵 搖、餘昭切、下平四宵

招搖：招、止遙切、下平四宵

相羊：相、息良切、下平十陽 羊、與章切、下平十陽

（須臾：須、相兪切、上平十虞 臾、羊朱切、上平十虞）

相伴： 伴、與章切、下平十陽

尙羊：尙、市羊切、下平十陽

徬徨：徬、息良切、下平十陽 徬、與章切、下平十陽

徬徨：徬、市羊切、下平十陽

（反切・韻部は『廣韻』による。）

また、『文選』卷七、司馬相如の「子虛賦」に「於是楚王乃弭節徘徊、翱翔容與」（是において楚王すなはち節を弭め徘徊し、翱翔たり容與たり）という句が見えるが、この徘徊を『史記』（司馬相如列傳第五十七）は、裴徊につくる。王念孫、『廣雅疏證』（釋訓卷六上）はまた「徘徊、便旋也。此疊韻之變轉也。……徘徊各本皆作徘徊、唯影宋本作徘徊。漢書高后紀注云、徘徊猶彷徨不進之意也。史記司馬相如傳、於是楚王乃弭節裴回、漢書作徘徊、後漢書張衡傳作徘徊、竝字異而義同。」と述べ、徘徊、裴回、徘徊、徘徊は用字が異なっても意味は同じであるとする。また、『漢書』

の司馬相如傳第二十七下の「大人賦」に「低徊陰山、翔目紆曲兮」（陰山を低徊し、翔けて以て紆曲し）とあるのに對し顏師古は注して「低徊は猶徘徊なり」と記し、また『楚辭』の九章「抽思」篇には「低徊夷猶、宿北姑兮」（低徊して夷猶し、北姑に宿る）とあるところに王逸は注して、低の字を徘徊と作るものもある（低一作徘徊）と記す。これらは用字や音には異同があるものの、殆ど同じ言葉であると考えてよいであらう。

徘徊：徘徊、薄回切、上平十五灰

徘徊：

裴回：裴、薄回切、上平十五灰

徘徊：徘徊、步皆切、上平十四皆

低徊：低、都奚切、上平十二齊

（反切・韻部は『廣韻』による。）

(8) 遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局）四五八ページ。

(9) 以下、「詠懷詩」の篇次は、『阮步兵詠懷詩註』（黃節註、人民文學出版社）による。なお、『文選』所收の十七篇の篇次もこの黃節註本と等しい。引用する詩の字句も全て黃節註本に依る。

(10) 而諸家又多以此篇爲八十二首之發端。

(11) 『吉川幸次郎全集』第七卷。

(12) 或閉戸視書、累月不出。或登臨山水、經日忘歸。博覽羣籍、尤好莊老。

徘徊と逍遙（森田）

(13) 例えば、『文選』卷四十三、嵇康の「與山巨源絕交書」に「又讀莊老、重增其故」、また同卷四十九、干寶の「晉紀總論」に「學者以莊老爲宗」など。

(14) 「莊子者、姓莊、名周、……然莊生弘才命世、辭趣華深、正言若反、故莫能暢其弘致。後人增足、漸失其眞、故郭子玄云、一曲之才、妄竄奇說、若閑奕、意脩之首、危言、遊鸞、子胥之篇、凡諸巧雜、十分有三、漢書藝文志、莊子五十二篇、即司馬彪、孟氏所注是也。言多詭譎、或似山海經、或類占夢書、故注者以意去取」（『經典釋文』、注解傳述人）阮籍の親しんだ『莊子』は、これら取り去られた部分をも含んだものであっただろう。

(15) 「彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢臥其下」訓讀は、福永光司『莊子 内篇』（中國古典選12）五十三ページによる。

(16) 『義門讀書記』第四十六卷「その源はこれを「離騷」に本づく。しかるに鍾記室（『詩品』）は以て小雅に出づと爲す」其原本諸離騷、而鍾記室以爲出于小雅。

(17) 逍遙遊者篇名、義取開放不拘、怡適自得。

(18) 注(13)参照。

(19) 郭慶藩云、逍遙、依說文當作消搖、又引王晉夜云、消搖者、調暢悅豫之意。（中華書局、新編諸子集成『莊子集解』卷一に引くによる）

(20) 司馬彪曰、言逍遙無爲者、能游大道也。

(21) 『晉書』卷八十二。「司馬彪、字紹統、高陽王睦之長子也、

出後宣帝弟敏。…注莊子、作九州春秋、…惠帝末年卒、時年六十餘」

(22) 羔裘翱翔。

(23) 翱翔猶逍遙也、是翱翔亦游燕之義。

(24) 現實からの脱出・上昇を願ううたとして他に第七十二首などもある。

(25) 第四十六首、第5句の「招搖」について黄節は「疑作扶搖、即反搏扶搖而上之意」と注す。『莊子』逍遙遊篇「湯之問棘也是已」以下の段に、鵬が「搏扶搖、羊角而上者九萬里」とあるのを意識してであろうが、果たしてどうか。また、第10句目。解釋によつては詩全對の内容が逆轉するが、疑問の残るところである。今は、川合康三氏に従つておく。(前掲川

合論文、八十四ページ)黄節は「用、以也。用者猶焉用也。焉以子爲追隨」と注し、子を海鳥とみて、反語のせりふであると解釋する。ならば、この詩は「バラドキシカルな小鳥の肯定」(川合氏、同論文八十八ページ以下参照)の一篇となる。なお Donald HOLZMAN 氏「Poetry and Politics」(Cambridge Univ. Press) 二二四ページにこの第10句の解釋の難しさについて觸れる。

(26) 『文選』卷二十三。
(27) 『文選』卷二十九。

(28) 『吉川幸次郎全集』第六卷「漢篇自跋」參照。

(29) 但我們如仔細一讀、便可見這些雜詩完全是模擬着古詩十九

首的；不惟風格相類、即情調亦極相似。(『插圖本中國文學史』第十章)

(30) 建安之世、擬古詩十九首等作的風氣甚盛、類皆題着『雜詩』之名。(『插圖本中國文學史』第十章)

(31) 本文中では第六十四首について殆ど觸れなかった。

1 朝出上東門

遙望首陽基

松柏鬱森沈

鸛黃相與嬉

5 逍遙九曲間

徘徊欲何之

念我平居時

鬱然思妖姬

朝に上東門を出でて

遙かに首陽の基を望む

松柏鬱として森沈たり

鸛黃は相ひ與に嬉ぶ

九曲の間を逍遙すれど

徘徊して何くにゆかんと欲す

我が平居の時を念へば

鬱然として妖姬を思ふ

第3句迄の情景は暗く沈んだものである。だが、墓場に植えられた松柏がうつそうと茂る、そのような人を滅入らせる眺めの中に鳥達の樂しげな様子が見える。その鳥達の姿に觸れてか、阮籍は九曲の間に逍遙を試みるのだが、それが不可能だということだけが却つて重くのしかかり、同じさまようという運動が、今度は徘徊という言葉で捉えられるより他になつてしまふ。つまり、第5句の逍遙は第二十四首・第三十六首と同じ鬱圍氣を持つが、それは結局現實には不可能なものであったから、第6句になるとすぐに現實裡の運動として徘徊という言葉に言い直されるのであろうか。

どうもこの詩においては、逍遙と徘徊は同じことの言い換えに過ぎず、逍遙と表現されていても、實際には徘徊と同じであると思える。そして詩の中で徘徊が登場するに至る雰囲気は、第十八首のそれとよく似るとかんじられるのだが。

黄節は、ここに『水經注』を引いて注するが、その注（卷十六）を見ると、『河南十二縣簿』には云う「九曲瀆は河南鞏縣の西にあり、西は洛陽に至る」とし、また、傅暢の『晉書』が「都水使者・陳良が運渠を通じさせ、洛口から九曲に注ぎ入れ東陽門に至らせた」とあるのを考えると、これは阮籍の「詠懷詩」の「朝出上東門、遙望首陽基」、そしてさらには「遙遙九曲間、徘徊欲何之」というそれである（河南十二縣簿云、九曲瀆在河南鞏縣西、西至洛陽、又按傅暢晉書云、都水使者陳良鑿運渠、從洛口入注九曲、至東陽門、是以阮嗣宗詠懷詩所謂朝出上東門、遙望首陽基、又言、遙遙九曲間、徘徊欲何之者也。」とあり、逍遙ではなく「遙遙」となっていたテキストがあることを示している。「遙遙」ならば、搖搖と通じて取つてよいであろう。『詩經』王風、「黍離」の詩に「中心搖搖」とある所に、毛傳は「搖搖は憂ひて慙うづたふる所無し。」陳奐は『漢書』五行志の顔注を引き「搖搖は不安の貌」等と注す。これは、かなり徘徊と近い言葉であると言える。私は、むしろこのテキストに従い、この一篇を徘徊する阮籍が現れる詩に含めたく思うのだが、第7・8句の解釋と共に疑問のままに残しておきたい。

徘徊と逍遙（森田）